



均整のとれた写実的な作風と割矧造りの構造には、師に学んだあとが見られます。深い彫り口で表わした抑揚のある表情、動きのある衣文、全体にやや角ばった奥行きのある躰つきなどは、快慶の作品とは異なる独特の表現があります。

また、躰内の納入蔵品からは、文暦2年(1235年)の願文や結縁交名等が発見されています。

阿弥陀寺は、神奈川県 藤沢市 時宗 総本山 清浄光寺(通称遊行寺)の末寺で、文和2年(1353年)遊行7代託何上人の開基と伝えられています。

能面

須賀神社には、室町時代の末期に制作された能面が三面残されていました。現在は、郷土史料館に展示されており、仮面史上貴重な資料であると注目されています。

能面女 縦20.6cm、横12.6cm、厚5.4cm

能面蛇 縦21.5cm、横15.1cm、厚7.5cm

能面鼻瘤悪尉 縦21.4cm、横17.8cm、厚10.8cm

いずれも材質は桧で、表に朱彩、裏には黒漆が施されています。

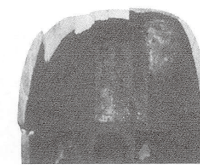
三つの面の中で最も注目されているのは能面女で、この面は色もはげ、鼻先や周縁が欠けるなど状態は良くないが、目の穴のくり方や口端あたりの彫りなど一つひとつの道具建や、全体から受ける完成された若い女面にみられない素朴さが、初期の能面の特長を表わしています。

また、この面の裏には、「此本ハエチ作也、角坊光盛法印、六十歳ニテ写之」という墨書があり、この面が、桃山期の面打で、京都醍醐日野の法界寺角ノ坊に住んでいた光盛の作品であることがわかっています。

光盛の子である光増は、豊臣秀吉の命によって、般若、小尉、あふみ女な

どを写し、「何れが本か、いづれが模か見え分らざる」というほどの出来ばえで、模面天下第一の称号を給わったほどの人物です。

父光盛の作品は、現在あまり知られていないため、この面は非常に貴重な面といえるのです。



能面女
裏面



能面鼻瘤悪尉



能面蛇



能面女
表面

菅浦古文書

菅浦には、鎌倉期から明治初年にまで及ぶ文書が1,255通残されています。

現在、これらは、菅浦区有文書703通、須賀神社所蔵文書34通、所有明示のないもの518通にわけて、滋賀大学日本経済文化研究所史料館に保管されています。

この史料は、昭和29年に滋賀大学の史料館に寄託され、昭和35年に上巻が、次いで昭和42年に下巻が解読公刊されました。その価値は高く評価され、研究も進み中世文化の解明に大いに役立ってきました。

解読された内容別に分けると次の七群になります。